
ミニシンポジウム

出口志向のススメ～基礎研究から実用化に向けて～

6月3日(土) 16:30～18:00 (教室1)

企画責任者：新家 弘也 (筑波大学・生命環境系) (連絡責任者)

坪内 泰志 (海洋研究開発機構・生命理工学研究センター)

近年、産学官連携という言葉があるように、アカデミックな研究内容を主体とする大学の研究室でもより実用的な研究が推奨される風潮にある。本来であれば基礎研究と応用研究は科学技術の発展における両輪であることが望ましいが、現状ではその相互連関がうまく機能しているとは言い難い。研究開発を経済活動に直結することが至上命題である企業と、人材の教育や学術的研究を主目的とする大学の隔たりは想像以上に大きなものと察するが、同問題を解決・昇華するためには「基礎研究」や「応用研究」という字面状の垣根を取り払うことが必要であると考えている。アカデミックに属する研究者にとっては知的好奇心を満たす研究を第一義に考えることは当然であるが、その研究から齎される結果が将来的には研究開発の基礎となる可能性をイメージすることが重要であり、そのためには基礎研究から派生したシーズが実用化に到達する過程を知る必要があるだろう。一方で企業研究はビジネスとしての目標が明瞭であるが故にスピード重視となる。アカデミック程の時間をかけて濃い研究をすることが(したくても)できないと推察されるが、研究開発の新たな知見を得るためにも基礎の導出過程を知ることは重要である。「マリンバイオテクノロジー」を称する本学会は双方の橋渡しをする要的な存在であることが期待されている。本シンポジウムでは、実際に基礎研究から実用化までを経験した研究者やその半ばに位置する研究者に講演して頂くことで、学術研究者は実用化までの具体的なロードマップをイメージする術を学び、企業研究者は研究開発における新たな着想を見出す機会となることを期待している。また、将来を担う学生や若手研究者にとっても「マリンバイオテクノロジー」が実際にどのような道筋を辿って、または課題を解決して実用化していくのかを知ることは、自身の今後の道筋を考える際にも自分の立ち位置を知る上で役に立つと考えている。本シンポジウムが、学術研究者及び企業研究者が議論を交え、新たな「マリンバイオテクノロジー」を創出できる関係を築ける契機となれば幸甚である。

海洋資源からのモノトリ研究

○塚本 佐知子 (熊本大院薬)

海域におけるリグニンの微生物代謝の理解からホワイトバイオへ

○大田 ゆかり (海洋研究開発機構 海洋生命理工学研究センター)

藻類を利用した持続可能な油脂原料の開発

○瀧村 靖 (花王株式会社 生物科学研究所)